

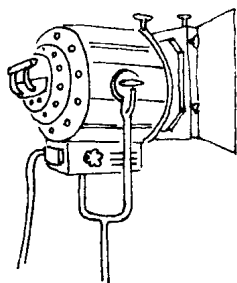
山田洋次作品集

8

立風書房

山田洋次作品集

8



山田洋次作品集 8



1980年2月10日 第1刷発行

山田洋次作品集 8

山田洋次

発行者——下野博

発行所——株式会社立風書房 東京都品川区東五反田3の6の18

振替——東京五——七四四九三

印刷所——信毎書籍印刷株式会社／株式会社美術版画社

(乱丁本・落丁本はお取替えいたします)

0095—R6308—8909

山田洋次作品集

8

目次

随章Ⅰ

5

- お疲れさま 7 父親の道 8 隣の客 10 心と心 12
 新鮮な目 13 娘の風邪 15 父の原稿 17 タクシーの中で 18
 蟹 20 俳優の目 21 炭鉱見学 23 焼芋屋のおじさん 24
 タクシー値上げ 26 演出過剰 28 城戸さん逝く 29
 楽しめる映画を 31 網走のロケ先で 32 アイヌねぎ 34
 美しい人 36 夢路 37 犠牲 39 ユーウツな日 40 選挙 42

随筆Ⅱ

45

- 飢えの時代 47 母の像 49 ミセス・コウの思い出 51
 ある仕立屋さんの話 53 ホンモノ・ニセモノ 56
 故郷のイメージ 59 悲しみのあとの喜び 62 友情よ興れ 64
 聞き巧者 68 チャップリンはもういない 70
 旅は道連れ世は情 73 東南アジアの映画事情 75
 強力のおじさん 79 日本のかあちゃん 81
 わが青春を省みて 83 私の映画事始め 86
 ロビンソン・クルーソー漂流記 88

映画で語りたいこと

91

対談

151

日本人の笑いをめぐって 〓 島田豊
タヌキの料簡 〓 柳家小さん
175
153

創作落語

187

真二つ(御利益)

189

頓馬の使者

206

目玉

221

雉子

238

山田洋次・年譜 〓 高橋正岡

256

装幀・多田 進
装画・出川三男

隨筆 I

昭和52年1月～6月「東京新聞」
“放射線”に掲載

お疲れさま

年の暮れは正月封切りの『男はつらいよ』の仕上げで慌ただしく過ごすのがこの数年習慣のようになつてしまつてゐるのだが、今回もまた、いつものように最終日の朝を徹夜で迎えた。

克蘭ク・インから約五十日、その間休みは三日ほど。あとの毎日ほとんどが残業、天候その他の理由でスケジュールがおせおせになり、終わりの二週間は毎晩十時か十一時、といった重労働の揚句の果ての徹夜だから、疲労もひととおりではない。監督の私は薄暗いステージの片隅のイスにもたれてウトウトしながら、とびかうスタッフの声や器材の音を夢のように聞いたりしている。

楽しい作品を作りたい、というのが私たちの願いである。観客がその作品を見ながら、これを作った人たちはどんなに楽しく仕事をしているのだろう、と想像してもらふことこそ、私たちの本望であり、おそい来る睡魔と戦い、荒れた胃袋にコーヒーを流し込み、冷たい水で顔を洗いながらの悲愴なまでの仕事ぶりを、観客には爪の先ほども思わせないことが、私たち作り手の誇りでもある。ついに夜が明ける。「さア、もうひと息だ」と声をかけてからさらに数時間、もう昼も間近いころ、ようやく最後の「OK」を私が宣告する。直ちに罐ビールが運びこまれ、形ばかりの乾杯をする。

五十日間、苦勞を共にして来たスタッフに私はたくさんのことを語りたい。ねぎらいの言葉、一年をふり返っての感想、さらにはわれわれ日本の映画人にとってますます厳しさを加えるであろう新しい年に、どのようにして希望を見いだすか、いや、なんとしてでも希望は持ち続けたい、等々――。しかし、まぶた瞼をはらし、無精髭をうかべ、疲れきった表情のスタッフを見回すとうまい言葉も
うかばず、私はせめて、精いっぱい感謝の氣持をこめて、

「お疲れさま」

とひとこと言い、スタッフは重い口調で

「お疲れさまでした」

と答える。

冷たいビールをのみ干し、表紙の千切れかけた台本をかかえて暗いステージから表へ出ると、ひんやりとした新鮮な空氣が身体を包む。澄みきった冬空が、睡眠不足の眼にまぶしいばかりに青い。

父親の道

私と同業の映画監督をやっている友人から電話がかかってきて、よもやま話の末、急に情ないなさけような声でこう言った。

「おい、参っちゃったよおれ」

「なにが」

「倅せがれの奴が、監督になりてえって言いやがるんだ、あの馬鹿野郎」

私も返事に困ったが、愚痴っぽい彼の言葉とはうらはらに、ある種の喜び、照れながらも親しい友人にはどうしても言わずにはおれない自慢話に似た気分が電話の向うから伝わってきて、ほほえましかった。

彼は決して売れている監督ではない。時々息子には言えないような題名の映画を撮ったりもする。映画で飯を食うことのつらさ、厳しさをたっぷり味わっているからこそ、息子には別の道を、つまりわれわれが自嘲じちようして言うところのヤクザ稼業ではなく、堅実な職業を選ばせたいと切実に願っていたにもかかわらず、その息子がある日父親と同じ道を進みたいと言いだした時の、彼の困惑ぶり、情なさ喜びとがまじり合った複雑な気分が、二兄の父親である私には手にとるように理解できるのだ。

しかし、これはわれわれ映画人だけがかかえている問題ではないだろう。今日、誇りをもって自分の息子に、おれの仕事を継げ、と言いきれる父親がどれほどいるだろうか。よほど恵まれた人か、金に不自由しない特権階級でもない限り、息子にはおれのようなつらい思いはさせたくない、もう少しマシな生き方をさせてやりたいと願うのがおおかたの父親の心情であらう。

これは家内から聞いた話だが、先日私の家の近くの小学校四年のクラスで、将来何になりたいか、という作文を書かせたところ、ひとりの少年が、自分の父親の日常生活をこまごまと描写した

あげく、

——ぼくはパパのような、のんびりしたサラリーマンになりたい。

と、結んだそうである。

その作文を読まれた少年のパパは、どんな顔をしただろうか。それを想像すると、私はふと、人生が楽しくなるのである。

隣の客

夜更けの小田急線に乗ったら、私の隣に老人というにはまだ少し若い男が坐った。酒を呑んでいる。この電車が普通か急行かという問答のあとで、彼は突如こう言った。

——私はねえ、今日で定年なんですよ。お別れの会を皆でやってくれましてね、その帰りです。これはつらい話になるぞ、と思った。できることなら逃げ出したいが、私の降りる駅はまだまだである。やむなく彼の話に相づちをうつことになる。

昭和二十二年、戦地から引き揚げてきて現在の銀行に入社、三十年を勤めあげたという。有名な一流銀行の名前を彼は告げたが、私の観察では、一流大学を出てエリートコースを歩んだ人には決して見えない。おそらく目立たない裏方のような仕事をして来た人だろう。

数年前、神奈川県に分譲住宅を買ったが、その支払いに退職金をつぎ込むと三百万円しか残らない。これから先どうやって暮らしを立てていけばいいか皆目見当もつかない。定年退職のお祝いに田舎から親戚が上京してくるが、この費用もバカにならない。歯がこのとおりガタガタしているが、入れ歯を作ると二十五万もかかる。女房にそう言ってばやいたら、そりゃそうでしょう、私の金歯なんか一本六万円もしたんだから、と、こう言いやがった。俺は頭に來た。亭主に断わりもなしに六万円もする歯を入れやがって、許せねえ……

——しかしな、おじさん、長年つれそった奥さんだろ、それぐらい許してやれよ。

つり革につかまっていた二人連れの若者が口をはさんだ。定年の男は一瞬考え込んで新しい聞き手に答えた。

——そりゃそうだ。俺だってあいつの知らないところで遊んだりしてるんだからな。

——おじさん、遊ぶって何するんだい。

——青年たちは、好奇心をむきだしにした。

——銀行のきれいな若い娘を誘ってさ。

——どこに行くんだい。

——喫茶店に行つてコーヒーごちそうしてやるのさ。ま、年に二、三度だけだな。

青年たちはブツと吹きだしながら、それぐらいたったら奥さん許してくれるよ、といった。聞き耳をたてていた車内の乗客の中に、笑いの波がひろがった。

心と心

ニューヨークに来て二日目。とにかく寒い。氷点下二〇度、風にあたったとき感じる温度は氷点下三〇度、八十年ぶりとか百年ぶりとかで、ニューヨークの子がびっくりしている寒さである。

ジャパン・ソサエティの主催で、私の作品の特集が行なわれ、招待を受けて出掛けてきたのだが、ホテルを出てタクシーを待つ数分間の寒さが耐えられず、ブロードウェイの散策などおよびもつかぬありさまで、ひたすらホテルの部屋に閉じこもっていたところ、『寅さん』ファンのコロンビア大学の学生が三人で押しかけてきた。

いずれも日本語がペラペラの連中で、これからどこかへ繰り出そうと誘うのだが、とても外に出る気はないと断わると、それじゃこの部屋で、とウイスキーやチーズを持ち込んで宴会がはじまり、寅さんはなぜ結婚しないか、とか、映画における芸術性とはどのようなことであるか、とか、ワイワイ、ガヤガヤ大議論の果てに、夜中の二時ごろ退散。

三日目の夜がオープニングで、簡単なセレモニーのあと、最近作の『寅さん』が上映されたが、奇妙なもので、東京の映画館で見ていると同じように、ニューヨークの観客は大声で笑ったり拍手をしたり、ハンカチで鼻をかんだり……。アメリカ人独特の社交的表現ではあろうが、終わると、

ワンダフル、マーベラス、ラブリー、と握手攻めにあい、馬鹿みたいにサンキューを繰り返しているうちにレセプションも終了、さて待ち構えていたのが昨日の三人組。新たな女子学生なども加えて総勢八人で今夜こそはと有無をいわずグリニッチ・ビレッジの得体えたいの知れぬバーのような、レストランのようなところへ連れ込まれ、またもや日本とアメリカの文化について尽きることのない大議論。

—— ニューヨークノヒト、カオツメタイケド、ココロマデツメタクナイヨ。

—— なるほど、東京の人間だってそうかもしれないな。

—— ソーダ、ソーダ。

陽気に冗談を言いながらオンボロタクシーに乗せられてホテルに送られ、時計を見たら午前三時。私はアメリカにいるというより、日本のどこかの都市にいるような錯覚に襲われている。

(ニューヨークで)

新鮮な目

ニューヨークの帰途ハリウッドに立ち寄り、新しい監督の仕事ぶりを見学しようと思ったのだが、正月あけという時期の悪さもあるのだらうけど、劇映画は現在一本も撮影していない、と言

う。ユニバーサル撮影所に知人を訪ねて見たが、あの広大な撮影所で現在撮影されているのはテレビ映画がたったの二本だけというありさま。紹介されてその監督と握手をかわしたが、彼早口で「いやあもう大変ですよ、なにしろ五日で一本作るんですからね、考えごとなんかしちゃいられません。クイック、クイックです。やっぱり劇場用映画をとりたいたいですねえ。じゃあ失礼」と言い捨てると、カメラの傍にかけ戻り何やら大声でわめきたてるといった慌ただしさである。

二、三の監督やシナリオライターと会って食事をしたが、出てくるのは愚痴、ため息、いかに良い映画が作り難いかという話ばかりで、ハリウッドに来れば何か新しい映画作りへの展望がつかめるかと思つてた私は、いささか失望せざるを得なかった。

今アメリカで最も評判の高い『ROCKY』という映画を観た。ボクシングの映画だというから、多分どぎつい場面を見せられるのだらうと覚悟していたら、これが意外だった。主演の俳優も監督もまったく無名に近い人で、舞台はフィラデルフィアの下町、ボクサーを夢見るチンピラ風の若者が、ドラッグストアに働く、これもごく平凡な顔立ちの地味な娘に恋をする物語で、娘には妹を愛してやまない肉屋の兄貴がいて、妹の恋愛をハラハラして見守っている——といった生活感の溢れる映画だった。

クライマックスの、この若者がひょんなことから黒人のチャンピオンと十五回戦を闘いぬくシーンは、さすがに迫力のあるものだったが、血だらけになってリングに立ちつくす若者に、娘が抱きついて——アイラブユー！ と叫ぶラストシーンに大勢の観客は拍手を送っていた。

目新しいものを、目先の変わったものを、と考えているうちは決して新鮮な作品などではしな